

## 中世ヨーロッパの手工業者 II

坂本信太郎

### はじめに

本稿は早稲田商学第350号(1992年3月)に掲載の“中世ヨーロッパの手工業者Ⅰ”に続くものである。前回は“Ⅳ手工業者”のうちの“②ツunftの成立”迄を記した。今回は“Ⅳ手工業者”の“③ツunft (Zunft) 制度, 規約”から始まる。

中世ヨーロッパの手工業Ⅰ及びⅡの目次を記しておく

### 目次

#### はじめに

#### I 中世の世界

#### II 村落社会と自然経済

#### III 商業の復活と都市の成立

#### IV 手工業者

##### ① 手工業者

##### ② ツunft (Zunft) の成立

##### ③ ツunft (Zunft) 制度, 規約

##### (i) ツunft特許状, ツunft強制

##### (ii) ツunft規約

(1) ツンフト構成員

(2) ツンフト集会, ツンフト役員

④ 親方, 職人, 徒弟

(i) 徒弟 (Lehrling)

(ii) 職人 (Geselle)

(iii) 親方 (Meister)

⑤ 手工業者の生活

V 同職職人組合 (Gesellenverband)

① 遍歴職人 (Wandergesellentum)

② 同職職人組合 (Gesellenverband)

VI ツンフトの崩壊

おわりに

参考文献

## IV 手工業者

### ③ ツンフト (Zunft) 制度, 規約

#### (i) ツンフト特許状, ツンフト強制

手工業者は自分達の立場を顧みたとき, 強力なギルドを結成し, 市政を牛耳っている意気軒高な商人達に比べて, 余りにも無力な姿をそこに見た。そこで商人ギルド成立の約半世紀ないし一世紀ほど遅れて, 商人ギルド (Kaufmannsgild) に倣って, 「クラフト・ギルド」 (Craft-guild) 或はツンフト (Zunft) と言われる各手工業種別の共同組合, 同職ギルドを結成したのである。従ってツンフトの規約内容は, 商人ギルドの規約内容と非常に類似した規約内容になっている。

そこで, 例えば, 1050~70年に承認された, 最古の商人ギルド特許状と言われているヴァランシェンヌの羅紗商ギルド規約を取り上げて見てみよう。これは第1から第75までの条項からなっている (内21~75条は後日の追加条項であ

る)。

その内容は①ギルドの宗教的義務に関する事項、②ギルド集会に関する事項、③ギルドの機能及び成員の権利義務に関する事項に大別することが出来る。

①については、第2条、第3条、第17条、第20条において、

- ・全てのギルド成員は聖ペテロ、聖ニコラウスの祭典にローソク12本と燭台を献じて、祝う事。
- ・全てのギルド成員は、五旬節（聖霊降臨祭）には貧者に施物を行う事。
- ・全てのギルド成員は、成員仲間の死者の為に通夜、埋葬、供養を行なう事。

などが記されている。

②については、第9条、第10条、第13条、第18条で、

- ・ギルド集会の席上に於いて、ギルド規約が読み上げられる事。
- ・ギルド集会の席上、ギルド首長を議長にしてギルドに関係するあらゆる事項の審議決定が為される事。
- ・ギルド首長を裁判長とした成員間の争い事、訴訟の裁判が行われる事、全てのギルド成員はこの判決に対して絶対服従すべき事。
- ・ギルド集会の参加者は子供や従者を連れて参加する事はできない。
- ・ギルド集会の参加者は杖や武器を携行して参加してはならない事。

などが記されている。

そして③については、

- ・全てのギルド成員は武装能力を持っていないといけない、そして外国市場へ出掛ける際には武装して参加すべき事。
- ・ギルド成員は旅行中は相互に援助しあう義務を持つ事。

などの商業旅行中の規定を記した第8条、第10条、第16条の各条と、

- ・ギルド加入者は、加入金15デナリを納付すべき事。

（デナリ；Denar, “Pfennig”，遠隔地交易用の銀通貨）

- ・手工業者や外来商人のギルド入会は許可されない事。

- ・手工業者がギルド入会を希望するときは、その手工業を止めてからでなければならない。特に、パン屋、居酒屋、仕立屋、漂白屋や、或いはその職業が非難されているような職の者が入会を希望するときは、ブドウ酒22樽を納付するか、その手工業を止めなければならない事。
- ・ギルド未加入者の禁制圏内での商業行為の禁止、この禁を犯す非成員商人は嚴重に処罰される事。

などのギルドの営業独占権を強く規定している第34条、第36条、第49条、第50条、第58条、第60条の各条文が含まれているのを見るのである。

11世紀以降になってから続々と多数の商業ギルド特許状が成立して来るが、その内容はいずれも大同小異であった。

さて、手工業組合、ツunftの特許状はどうであったろうか？

ツunft最古の特許状は1061年、パリの蠟燭製造業者に与えられた文書であると言われているが、その内容がどのようなものであったかは知られていない。内容の知られているツunft最古の特許状は、前記したように（早稲田商学350号、P. 243）1099年のマインツ都市領主・大司教 Rudhardus が同市の織布工ツunftに与えた公認文書である。それには、

① ツunftの宗教的業務に関する事項として

- ・聖シュテファン教会内に織布工達の共同墓地を分与する事。
- ・ツunft成員は西門及び教会の屋根の修理をすべき事。
- ・蠟燭その他の善行を捧げる事。

② ツunft規約に関する事項として

- ・ツunft首長を選任する権限は、「保護者」としての教会が保留する事。
- ・工業警察の権能は、「保護者」としての教会が保留する事。

などが記されている。

この公認文書よりも、ツunftとしての特徴的姿がもう少し見られる特許状として、ウオルムスの司教アダルベルトが、1106年か或いは1107年に23名の漁

夫から成る漁師ツンフトに与えた特許状がある。ここには、

- ・23名の者に漁業と魚販売の独占権と監督権を与える事。
- ・漁獲及びその販売の権利を一定数に制限し、その世襲を認める事。
- ・ツンフト成員が死亡した場合、最も親近な者が、その職を相続する事。
- ・相続人を欠く場合は、ツンフト集会を開催し、協議し欠員を補充する事が出来る。補充者は集会における承認を要する事。
- ・ツンフト規約に違反して逮捕された者は、都市領主の裁判官に引き渡され、3タレントの罰金を課される。罰金の2/3を司教に、1/3をツンフトに分配する事。

など、その経営に確固とした保証を与える事が記されている。

手工業者達にとって大きな関心事は、狭隘な市場である中世都市内で、自分の生活が競争により共倒れになりはしないか、と言うことであり、それを防ぐことにあった。そのために

① 対外政策（ツンフト非構成員に対するもの）として

都市禁制圏内での手工業職営業の独占〔他所者（非構成員）の営業の禁止〕。

② 対内政策（ツンフト成員に対するもの）として

経営上の諸条件（道具、原材料の数量、徒弟数、作業・販売の場所や数そして方法等）の厳重な統制と平等の維持。

の2条件を保証する条項、所謂、ツンフト強制（Zunftzwang）の条項が、明確に確保され、記載されている特許状を獲得することが必要であった。

時代の経過に伴い、これらの状項を容れた特許状がやがて出現して来るようになった。例えばケルン市が1149年毛布工に、同じく1180年頃ろくろ工に、そして1327年毛皮匠などなどに与えた特許状に明らかに見てとられる。

こうした特許状を得ることによってツンフトは法律的に、ツンフトに属さずして同じ手工業を営む者にツンフトに正式に加入すべき事を強制することができるようになり、また手工業経営の排他独占権の確保を公権によって保証、擁

護される事になったのである。ツunftへの加入強制は、正にツunft制度の核心を成すものであった。

ケルンの毛織物工ツunftが得た特許状では

① 一般的事項として

- ・ツunftは、親方と一般成員から構成される。
- ・毎年聖マルチンの日（11月11日）、29名の親方から選挙により2名のツunft首長を決定する。選ばれた者は、その任を拒否することは出来ない。
- ・首長の重要な職分は、ツunft条件の違反者や規格外製品の生産などに対して、ツunftによる裁判権及びツunft罰令権を持ち、これを施行すること、及び工業活動の監督、監視に当たることである。
- ・罰金は、特定の箱中に保管し、教会用ローソク購入やツunft会館の為に使用、残部については、その半分を親方に、他の半분을一般成員に分配する。

② 対外政策として

- ・営業活動を欲する全ての織匠はツunftへ加入しなければならない事（加入強制）。
- ・加入に際しては、12マルクの加入金と、1フィールテルのブドウ酒を納付すべき事。
- ・一般成員（親方、Unverdiente Meister. Bruder）の息子の加入金は上記の半분을、特別成員（役員親方、Verdiente Meister）の息子に就いては全て無料とする。
- ・親方数は29名とし、その身分は何人も購入することは出来ない。

③ 対内政策として

a) 技術的面からの統制として

- ・親方が使用し得る徒弟数は2～3名程度に限る。
- ・非構成員の採用禁止。

- 原材料の羊毛購入は羊毛取引所に於いて行われ、ツunftの統制・監督の下にある。
- 全てのツunft成員は2台以上の織機を所有してはならない。
- この工業に関連している晒布工、染色工への規定。
- 製品出荷前の品質検査（製品の長さ、幅、目方について）の実施、違反品の処罰。
- 製品検査スタンプの捺印のないものの販売禁止、違反者の処罰。
- スタンプ捺印は毎週月・水・金の3回実施。

b) 経営面からの統制として

- ツunft非構成員との一切の協同を禁止する事。
- 労働時間は朝から夕方までに限定する事（14世紀以降になると灯火の下での労働は全面禁止となる）。
- 違反者は道具を没収されたうえ、手工業権を1年間喪失される事。

が記されている。

亦、同じくケルンで1397年にツunftを結成した絹刺繍手工業者の特許状では、ツunft強制（第9条）は言うまでもなく、その加入条件として更に詳細にケルン市に4年間居住している事（第1条）、そして徒弟期間6年間を終えている事などを加えて規定している。

ところで、前記の1099年のマインツ毛織物工、1106年のウオルムス漁師ツunft特許状に見るように、ツunft結成初期の段階においてツunftはツunft首長の任命権、ツunft裁判権・ツunft罰令権も持たなかった。それらは、いずれも都市当局、都市参事会的手中に掌握されていた。ツunft自身の選挙によって首長の選任が行われる様になり、またツunft規制の違反者に対してツunft自身の手で裁判を施行し、処罰を下せるようになったのは、手工業者の実力が増大して来た12～13世紀以後の事である。このことは1149年のケルンの毛織物工、1197年の同じくケルンのろくろ工、1251年のシュテンドルの織布

工、1226年のバーゼルの毛皮匠等に与えられた特許状に明らかに読み取れる。

しかしながらツンフトの裁判権は常に一定の範囲内に限定されていた。

確かにツンフトは違反者を自らの裁判で処罰することは出来たが、違反者がその命令を不満とし拒否し抵抗する場合には、都市の上級裁判に委ねなければならなかった。実際には都市裁判所の関与を必要とし、避けられなかった。

またツンフト権限によって、ツンフト規約を社会の新情勢に応じて有利に変更し追加しようとしても、勝手に議決し実行することは不可であった。最終的には都市当局、都市参事会の承認を得なければならなかったのである。その際都市共同体、特に都市当局にとり不都合と目される決議や規約の改定・追加については、当局にはそれを廃棄する権利が保留されていた。ツンフト権限の範囲は、あくまでもツンフトの秩序維持と手工業者の利益擁護に関する事柄のみに限られていたので、ツンフトがその範囲を逸脱しているかどうか、都市当局或は都市参事会はいつでもツンフトに干渉することが出来たのである。

14世紀後半になると、手工業者階層の勢力は強力となりツンフト一揆を興し、都市当局、参事会としばしば衝突を繰り返すようになった。そして15世紀以後になると、ツンフト成員も都市行政に参画する事が出来るようになったが、都市当局、都市参事会のツンフト規約への干渉、影響力は反って増大し強化されるようになってしまった。

## (II) ツンフト規約

### (1) ツンフト構成員

12世紀末(1179～1183年)、ケルン市長が同市のろくろ工ツンフトに与えた特許状に

- ① 親方としてツンフトに加入を希望する場合、加入金12シリングを納付の事。
- ② 徒弟としてツンフトに加入を希望する場合、加入金4シリングを納付の事。
- ③ 単に社交的或は宗教的目的でツンフトに加入を希望する場合、24デナリを納付の事。



と記し、ツンフト構成員を3種類の段階に分けている。

これらの人々は広い意味での構成員ではあるが、本来の意味で構成員と呼べるのは、第1に属する親方層の人々のみである。何故ならば、ツンフト加入により、製品の生産と販売という職人にとって最も重要な手工業経営権、そしてツンフト集会への参加権やツンフト役員の選挙権、被選挙権の三大主要権利及び会員が経済的困窮や重大難事に直面している際の被救援権、更に人生の重大事である埋葬が教会内ツンフト共同墓地に保証される（特に当時の人々の重大関心は死後天国の世界に安住することであった。そのために埋葬地として教会墓地を求めておかねばならなかったが、それは個人では経済的に容易なことではなかったのである）などの諸権利を所有出来るのは、第1に属する会員のみに限られているのであって、第2、第3に所属する人々には手工業権は勿論の事、ツンフト集会に出席することや、選挙等に加わる資格も与えられなかったのである。唯、社交的、宗教的目的の集会の時にのみ参加が許可されるだけだったのである。従って本来ツンフトは親方（Meister）層による組織なのである。

都市の中で手工業者が一市民として作業場兼店舗の家を持ち、従業員（職人や徒弟）を駆使して経営活動を行い、自由で快適な生活を過ごす為には、何よりも先ず親方の身分を取得しておかなければならない。親方身分の取得、公認確保はツンフトに加入することによってのみ得られるものである。

14世紀以前に於いて、親方身分の取得即ちツンフト構成員になるためには、唯当該ツンフトに定められている加入金を納付するだけで済んだ。その金額は職種によっていろいろで、2～4グルデンを規定しているものが多かった。ツンフトの中には6グルデン以上の高額な金額を課するものもあった。そのようなツンフトは一般に高収入が期待できて人気の高い職種のツンフトである。しかしながら当時の手工業者達にとって、これらの金額はいづれも決して低額とは言えない大きな負担であった。従って加入は容易なことではない。加入金はツ

ツunft成立当初から既に自ずと親方数をいちじるしく制限する元になっていたのである。加入金はツunft強制に形式的でなく実質的な意義を持たせるものであった。

ところで14世紀にはいると、もうツunftはその機能範囲の至るところに限界を見せる様になってきていた。そして一方においては、修業年期を経た徒弟のツunft加入志望者や未だにツunft加入を果たせないでいる職人も増加してきていた。こうしたことは少数者による営業の独占特権と市中市場での専売特権の確保維持を第一としている既存の親方達を次第に排他的傾向に向かわせることになり、加入志望者に入会制限を目的とした各種の制限的条件が加えられて行くのである。

14世紀末から15世紀に頻発している加入金の増加もその現れの一つであった。例えばケルン市の青銅工ツunftの親方加入金の場合、1330年に7 シリング（当市外の者、他所者に対しては1 マルク）であったのが1421年には6 グルデンに、同じく当市の毛皮匠に就いては、1371年、3 グルデンが1397年には6 グルデン、絹製造業では1437年の2 ライン・グルデン（3 マルク 5 シリング）から1470年 3 ライン・グルデンに増徴されている。徒弟加入金に就いても同様であった。1179～82年、ケルンのろくろ工 4 シリングが1397年には1 グルデンに、1330年、青銅工 3 シリングが1421年に1 グルデン、毛皮匠、1397年、1 グルデンが1516年 2 グルデン、金細工匠14世紀初頭 1 マルクが1397年 8 グルデン、甲冑工、1391年、5 マルクとぶどう酒 1 フィーテルが1397年、2 グルデンとぶどう酒 1 フィーテルに……。

ところでこの徒弟の加入金は一般子弟の場合であって、ツunftの一般成員（親方、Bruder, Unverdienste Meister）の子弟に就いては半額ないし可成りの減額、特別成員（役員親方、Verdienste Meister）については更に全額免除される事があると言う差別がされていた。親方の子弟以外の者の入会を拒否して親方の子弟の入会を容易にし、ツunft特権の世襲化を強く意図しての事である。

ツunft特権の世襲化は、既に漁師ツunft特許状に見られたように、ツunft成立当初から、特権の一つとして謳いあげられていたものである。継承者のいない親方未亡人にも当然、世襲権は継承された。

ツunft加入の異常な困難さを擦り抜けてツunftの成員の地位を容易に得る手段として、「婚姻鍛冶屋 (Eheschmieden)」という言葉で呼び囃される手段があった。親方の娘或は親方未亡人と結婚することである。そしてこれにより親方の地位を得た徒弟修了者や職人をこう呼ぶのである。

ツunftは各業種毎（業者数の少ない、発展しない、弱い手工業種はツunftを結成出来なかったの、類縁職種のツunftに寄生していた）、各都市毎に結成された極めて局所的なものであって、同じ業種であっても他市に於けるツunftとは何の関係も無かった。まして全国的なツunftなどは存在しなかった。

都市当局もツunftも自都市内の産業発展、勢力拡張の為に、手工業者が都市から出て行くことを極力阻止しようと努めた。

亦ツunft加入者が他市に移転した場合、既に得ていたツunftからの権利一切を剝奪し、そして再び戻って来る事を禁止し、また戻って来た時にはその手工業に従事することを禁止したのである。

15世紀、ゾーリンゲン市では、「ツunftの秘法を護るため、鍛冶、焼入れ師、砥ぎ師のツunft構成員は、他市、他国へ行かぬと言う誓いをしなければならない。他市、他国に秘密を漏らしてはならず、……その技術を教えてはならない」と規定している。この場合、簡単な技術の手工業についてはこうした拘束は少なく、また誓いの必要もなかった。また、他所者による産業スパイの被害を蒙ったイングランドでは「他所者は何人たりとも徒弟として受け入れてはならず、他国に出掛けたツunft構成員はすぐに帰国しない場合、ツunft構成員の権利を失うばかりでなく、他所者と見なす」と言う法令を出している。

## (2) ツンフト集会、ツンフト役員

ツンフト集会の開催、ツンフト事務の処理・遂行や宗教的、社交的行事などを行うため、大抵のツンフトはツンフト会館をもっていた。

ツンフト集会はツンフトの利害に関するすべての問題について協議し、ツンフトの総意を決定する最高機関である。従ってツンフト集会へ参加することは、親方会員にとって最も重大な権利であると同時に義務であった。すべての親方会員の出席が強制され、許可なくして欠席した場合には重い罰金（2シリング）を課せられた。定期に開かれる年次大会のほかに、必要に応じて臨時の集会が召集された。

集会で審議され、議決される事柄は

- ・ ツンフト規約の制定と変更に関する件。
- ・ ツンフト首長（Zunftmeister）の選出。
- ・ ツンフト加入希望者の採用審査に関する件。
- ・ ツンフト規約違反者制裁に関する件。
- ・ 都市当局及び他ツンフトとの紛争に関する件。
- ・ ツンフト採算に関する件。
- ・ 収支会計報告。
- ・ 宗教的行事や社交的行事に関する件。

などで、一般的に多数決によった。

前記（本稿 p. 81）したように都市領主、都市当局の手から離れて、すべてのツンフトでツンフト首長が親方会員の手で選挙されるようになったのは、ツンフトの自治が十分に認められるようになった12、13世紀以降の事であった。

ツンフト内の親方会員が首長の被選挙権者で、1～4名（2名の場合が多かった）を選出した。任期は普通1年であった。そして選ばれたものはその任命を拒否することは許されなかった。

ツンフト首長の職分は

- ① ツンフト集会を召集し、議長として議事を進行、指導する事。
- ② ツンフト事務の執行。
  - ・ ツンフト会員の生産・営業活動が規約通り実施されているかどうかの巡回検査と監督。
  - ・ ツンフト加入希望者に関する件（資格調査と許認可の裁定）。
  - ・ 製品価格（最低価格）決定。
  - ・ ツンフト財産の監督、ツンフト会計の管理、会計報告の施行。
  - ・ 宗教的及び社交的行事の準備、開催。
- ③ ツンフト裁判の執行。
  - ・ ツンフト規約違反者の探索、処罰（罰金刑、道具の没収、村八分、権利停止、成員権剥奪）の判決、施行。
  - ・ ツンフト会員間の紛争、訴訟の調停。
  - ・ 都市当局や他ツンフト及び商人ギルドとの紛争問題の処理。
- ④ 書記、検査人、会計、使者などのツンフト役員の任命。

などであった。大きなツンフトでは更に毎年、委員を選挙し、ツンフト委員会を結成して、首長の職分を補佐させた。このように首長はツンフトの全権者としてツンフトを「統治」、「監督」し、私用を抛ってまでして、ツンフトの利益の為に奮闘しなければならなかった。

ツンフト発生当初は、組織は小規模で、ツンフト業務も少なく単純であり、ツンフト首長は殆ど無報酬の名誉職的な存在であった。しかしツンフト規模が大きくなるにつれて、業務は複雑多岐にわたり、激務となったので、当然の事として首長及び役員にツンフト経常支出として年3～4マルクの報酬が支払われることとなった（商人ギルドでは年300マルクも与えられる首長もいた）。役員の給与は年2マルクであった。

首長報酬や役員給与以外のツンフト経常支出に宗教的行事に対するものがある。牧師への謝礼、献金、蠟燭代、施し、教会行事への参加費、教会内の会員

用共同墓地の維持管理費、会員埋葬費、教会堂の維持・修築費などで、これらは可なり高額を占めるものだった。またツンフト市壁防衛民兵に関する費用、特権維持の為に都市当局への入費、困窮会員への援助救済費、会員間の紛争処理費用、集会用・社交的宴会用の費用、ツンフト施設（会館、共同作業場…）の維持管理費などもそうであった。

このほかにツンフトの支出として、新たに土地や施設を購入或は再建する為の、また都市参事会上級裁判への訴訟事件用の費用や都市当局の緊急徴収賦課金などの臨時的支出があった。

これらの支出に対するツンフトの収入はどうであったろうか。先ずツンフト新構成員の親方からの親方加入料及び徒弟加入料である。次にツンフト集会や各種行事の無断欠席者、ツンフト規約の違反者にたいする罰金、そして毎年若しくは毎週ツンフト役員によって集金される組合費が主なる財源であった。また上記のごとき臨時の出費の際には随時賦課金が徴収されたのである。

#### ④ 親方、職人、徒弟

##### (i) 徒弟 (Lehrling)

ツンフト構成員には親方と、本来的な構成員ではない成員の職人、徒弟による三階級がある。その最下位の位置にいるのが徒弟で、親方身分すなわちツンフト構成員になる為の第一階梯である。

徒弟制度は既に12世紀には存在していた。毛織物工ツンフト特許状（本稿 p. 80）にみられるとおりである。ツンフト成立初期においては、徒弟希望者はツンフト所定の徒弟加入金を納めさえすれば容易に徒弟身分が得られた。そしてまた親方によって修業修了を認められた時、ツンフト承認下に新親方としての親方加入金を納付するだけでツンフト構成員の資格を得る事が出来た。しかし14世紀中葉以後になると、親方加入制度の強化に並行して、徒弟採用規定が制定され、徒弟希望者に各種の制限が設けられるようになった。

第一は修業期間であった。

ツunft構成員の資格を獲得する為には、ツunftによって定められた一定の徒弟修業期間親方の下で誠実に奉公しなければならない。これを修了しない場合は罰金が課せられるだけでなく、ツunft加入の権利が剥奪された。

大部分のツunftは2～4年を修業期間としていた。

加入金について一般市民子弟の加入者希望者とツunft構成員子弟との間に差別があったように、修業期間についても差別が見られた。例えばケルンの金細工ツunftでは一般子弟の徒弟が8年間であるに対し、役員親方（Verdiente Meister）の息子は2年、一般親方（Unverdiente Meister）の息子は4年間で、共に父親の下で修業すればよかったのである。

第二は年令制限であった。

親方身分の入手に可成の期間を要する事から、余り年を取り過ぎていても適切ではない。また厳しい徒弟奉公を努めるには、それなりの肉体的条件が整っていなければ無理であるので余り若すぎてもいけなかった。職種によって異なってくるが平均して10～16才が妥当な年令とされていた。

第三は素性調査であった。

他都市の者、外国人などの他所者や農奴、隷属民の子弟などの非自由人または私生児及び「不名誉」な職業に属する者の子弟は拒否された。「名誉ある素性」「名誉ある両親」の子弟でなければならず、それを示す身分証明書を必要とした。

更に加えて「嫡出の生まれ」である事も条件に加えられ、嫡出証明書が課されている。15世紀中葉以後になると嫡出者でない者を排除する傾向は愈拡大された。

「不名誉」な職業として、理髪師兼外科医、理髪師、羊飼、皮鞣工、粉屋、麻織物工、塔守り、夜回り人、音曲師、笛吹き、ラッパ手、道路清掃人、墓掘り人、捕吏、死刑執行人、等が挙げられている。



Fig. 1

1714年ライプツヒ市のツフトが下付した

Johannes Mieseler の徒弟奉公契約書

徒弟希望者はまだ未成年であるので、奉公に際して父兄を保証人にした。契約書を交わすこともあった。住み込みの徒弟に食事と寝所を与えることは親方の責任であるが、衣類の支給は保証人の責任だった。

徒弟生活は彼らに「不幸なことに奴隷だって罪人だって、俺達より余計に働かされることはないだろうよ」と嘆かす程に、非常に辛い厳しいものだった。

夜明け前に鐘の音にたたき起こされ、店と家の前を掃き清め、拭き掃除をし、親方や職人の道具や必要な色々な材料を残らずきちんと具合よく整える。職人には愛されて何事も良く教えてもらい、早く腕を上げられるように、敏捷に十分に仕え、世話を尽くさねばならない。夜には仕事場の片付け、戸締り、職人



達の寝床の整備等全てに柔順に怠けずに行わなければならなかった。時には親方から或は職人達から棒を食らうこともあり、余りの辛さに耐え兼ね逃亡を図る者もいた。捜し出され引き戻されて、逃亡していた時間の2倍も余計に仕事をさせられるのだった。再三にわたって逃亡が繰り返されると、ツンフト構成員加入の権利を失い、永久に追放されることになった。又罰金が課せられたし、それまでの教育に要した入費金額の返済を要求されたりした。

徒弟が所定期間、忠実に任務をはたし、十分な技能修得が認められると、親方から修業証明書が授与されて独立に向かって希望に満ちた前進が始められるのであるが、ツンフト構成員加入の申し込みをする前に、自分の仕事場でもあり店舗でもある住居や各種の道具及び高額な親方加入料を準備しなければならない。これらを調達することは容易なことではなかった。従って徒弟修了後すぐに独立することは殆ど出来なかった。普通徒弟修了者達は親方の下に2年間程職人として雇用され、準備に励んだのである。

しかし、ツンフトの親方の最高数が決められるなど排他的傾向が強まった14世紀中葉以降には、ツンフト構成員加入条件に更に幾つかの条件が加えられる様になった。先ず、新親方誕生祝いの豪華な披露宴会費用やその他を賄えられる者がふさわしいとされ、「一定以上の財産保有者」であることが要求され、「財産証明書」が必要とされた。次にこれ又高額な出費を伴う「親方試験作品」の提示、一定期間他都市を巡り「遍歴修業」を積むことであった。

ツンフトはこのように次第に封鎖的になってゆき、「親方身分の獲得は、無資産者にとっては、法的には可能であっても、事実上は不可能である」と言われるように、今年年期修了後5～6年で独立することは不可能となった。

## (II) 職人 (Geselle)

職人は本来、徒弟奉公修了者と親方に至るまでの過渡的状态にある手工業労働者であると言えよう。

ところで、この状態にある労働者は



Bei der Aufnahme in den Gesellenstand wurde der junge Buchdrucker „gegauscht“.

Fig. 2

印刷工職人仲間に加えられた徒弟修業修了者が、先輩職人から印刷工恒例の祝福の儀式—水漬の儀式—を受けている。左下隅には親方が修了証明書を手に、威儀を正して見詰めている。

- ① 親方身分獲得の期待に燃えて、不安定で不満足な現状に耐えている待機者。
  - ② 親方身分獲得に必要な資金が得られなかった為、技術能力が不十分であった為或いは其の他の理由で親方参入を拒否され、希望を失った者。
- に分ける事が出来る。

しかしツンフト特権独占を目指す厳しい諸規定は、今や可成りの人数になっている①の待機者の期待を破るものであった。少数の親方の子弟や運良く親方の娘や未亡人と結婚出来た婚姻鍛冶屋以外の者にとっては、親方に成る事は殆ど絶望的と言ってよかった。従って職人は実值的にはいつまでも親方の従属的地位から抜け出せないでいる②の手工業労働者達であったと言える。

親方に雇って頂いている、低賃金の給料取りに甘んじざるをえなかった。その雇用も日雇い、週雇い、6週間雇い、季節雇い、年雇いといった不安な状態にあるのが普通であった。定まった仕事場で、定まった仕事をする事の出来ない労働者で、自分の家を持つことは勿論結婚することも出来ないでいた。

親方との契約期間が切れたり、解雇されたり、或は自ら離職した場合、親方から親方へ、町から町へ、或は他都市へ、他国へと職を求めて放浪して歩かなければならなかった。親方はいつでも望む時に突然解雇を言い渡すことが出来たが、職人側からの契約破棄は8日、1ヶ月、6週間或は3ヶ月前に予告しなければ許されなかった。他所に職を求めて歩く所謂流れ職人に、都市によっては賦課金を課したり、短期間の滞在しか許可しなかった。更に職に就けないでいる流れ職人に対しては浮浪者と同じに扱い、追放に処したり、投獄または市中の汚物清掃や軍隊に徴収して強制労働を課す等の処置を行ったりした。

職人の賃金最高額はツンフト規約で規制され、親方がそれより高額の賃金を支払う事を嚴重に禁止した。15世紀中葉の平均日給は賄いなしで4.5シリング(約54ペニヒ)であった。勿論職種や、日給か年或は月給か、賄い付きかにより相違した。(年或は月給は、賄いと宿舍費が含まれるので、日給より遥かに低かった)

例えば

大工、石工、屋根屋では

	職人日給	親方日給(参照)
賄い無し	5 シリング (約60ペニヒ)	8 シリング (約96ペニヒ)
スーブ付き	3.5シリング (約42ペニヒ)	6 シリング (約72ペニヒ)
賄い付き	32ペニヒ	4 シリング (約48ペニヒ)

であった。その外に就いては

網匠	日給	1～2 シリング	(約12～24ペニヒ)
床屋、仕立屋、帽子屋	年	2 グルデン	(約1日 1.97ペニヒ)
魚屋	年	7 マルク	(約1日 4ペニヒ)

注 ただし1年の労働日数を250日として換算した

であった。

また出来高払いで支払われる事もあった。勿論この場合にもツンフトの規制を受けた。穿孔細工を施してる琥珀職人の労賃は1000個毎に最高4ペニヒであった。

中世の職人は日中に製品の生産を済ますのが原則であった。「眼がきいて十分に仕事がやれる明るさまで」と言うのであり、労働時間は日の出から日没迄に限られていた。従って季節によって異なった。夏期——聖ウルバンの日（5月25日）から聖ラウレンツの日（8月10日）迄——は朝5時から夜7時迄の14時間、冬期は朝6時から夜6時迄の12時間が平均の労働時間であった。これには1時間程度の昼食の為の休憩時間が含まれている。

しかし日曜日や祝祭日の労働はツンフトにより禁止されていたし、土曜日と祝祭日の前日の夜は休みとなった。そのほか親方達の守護聖人の祭日やツンフト構成員の葬儀の日にも休業があった。平均して1年に約140日くらい休日があり、労働日数は250日以上にはならなかった。又職人達が勝手に自分達で作りに出した「聖月曜日」と呼んだ休日があった。日曜日、居酒屋で職人同士が宴会を始め、飲み且踊り騒いで沈没し仕事に出て来なかった事による休業である。職人にとって「1日は長くても1年は短かった」のである。

著しい低賃金、厳しい労働、不安定な不満足な生活、そして低い社会的な地位からの脱出は、厚いツンフトの壁に阻まれ既に誰の目から見ても到底不可能であること明らかであった。職人達には親方と競争する権利はなかった。どんな武器も持つ事は禁じられた。例えそれが長い棒一本であっても、ナイフであっても。まして集団・徒党や同盟を成すことは厳禁されていた。

14世紀になると各地に職人運動が発生し始め、要求を掲げて「親方からハンマーを取り上げる」つまりストライキが企てられるようになった。そして14世紀末には、職人達はツンフト親方から分離し、職人同士、同一身分者の結集である「職人組合 (Gesellenverband)」を結成するに至り、ツンフトや都市当局と対立し衝突を繰り返すようになった。

### (Ⅲ) 親方 (Meister)

手工業労働者の三階級の中で頂点の位置に生活するのが親方である。

親方という言葉がいつ頃から使われ始めたのだろうか。親方身分がいつ頃から意識され、確立されるようになったのであろうか。

5世紀末、西ローマ帝国滅亡以前の帝国領内には多数の各種手工業労働者が存在していた事及び11世紀末以前には、都市城内にも荘園領内にも自由な手工業労働者、巡回手工業労働者の活躍が見られていた事は既に記した (早稲田商学第350号 p. 235~)。これらの手工業労働者達は年令、経験、技能に相違はあっても、互いに自由、対等な関係にあり、身分上の相違は無かった。違いがあったとしても、せいぜい人格的に又は能力的に優れている者を一時的に指導者に据えるとか、或は教えを頂いた先輩、師匠として尊敬するという以上に出ることは無く、誰もが鍛冶屋のフリッツであり、仕立屋のハンス、大工のヨハンであって、鍛冶屋のフリッツ親方、仕立屋のハンス親方……では無かったと思われる。

手元の文献・資料の中に「親方」の言葉を初めて見るのは1149年ケルン市が毛布工に与えたツンフト特許状 (本稿 p. 80) に於いてである。

手工業労働者の希望の頂点として、そして最終の努力目標として、手工業労働者が強烈に意識せざるを得なかった親方身分が確立したのは12世紀中葉だったと考えてよいであろうと思う。ツンフト特許状により身分が確立したと言う事は、親方身分が社会的に公認された事を意味し、手工業労働者の社会的地位の向上に資する事であった。

手工業労働者が親方になることによって、自由で安定した裕福な生活を持ち、いよいよ発展して都市上級階級の一員になる事さえ可能であった。それは強力なツunft規約の庇護によるものである。

親方層を支えるツunft規約が「①对外政策としてツunft成員による手工業経営の独占及び非構成員のツunftへの加入強制及び②对内政策としてのツunft成員平等の原則」の両面を含むツunft強制を根幹とするものである事は既に記した。

親方達は特権維持の為に厳格に規約を履行した。更にその特権持続に危機を感ずるような事が生ずれば、いつでも規約の壁を厚くして防ぐ事に意を傾けた。又総力を挙げて闘うことも辞さなかった。

「ツunft成員権を獲得せずに、当市内に居住して、製品をつくったり、販売しようとする者は厳しく処罰されるべきである」の加入強制の規定に基づいて、親方たちは非構成員である「渡り職人」、「もぐり職人 (Störer)」や「縄張り荒し、闇職人 (Pfuscher)」を摘発し厳しく処罰を加え、或は容赦なく迫害して追放する事を行った。

勿論、どんな親方も非構成員を採用する事や非構成員に仕事を与えたり、非構成員から報酬を受けて仕事をしてやるなど非構成員に協同する事はツunft規約違反であった。亦、親方が同時に他のツunftに加入する事も同じく重大な違反事項であった。(これらは一人の親方が他の親方を凌駕して、強力な経営者に発展する事を防止する目的を持ったもので、同時にツunft成員平等の原則に則ったものでもあった。) 違反者は親方身分没収の処罰を受けねばならなかった。ツunft罰令権により地域独占を維持することに努める事は親方たちの務めであった。

さて、ツunft構成員平等の原則は狭隘な都市内市場で親方達が互いに安定した営業を続行して行く為の方策であった事は言うまでもない事である。その為に親方達は、下記の①～⑦の条項の厳守に努めた。

- ① 親方は必ず自分の仕事場（店舗でもあり住居でもある）を持たねばならないが、一個所しか所有できない事。
- ② 作業用用具、機器及び生産量制限の事。

例えば、道具、機器に就いては

- 1378年 毛織物工ツunftト……………親方所有織機 2 台まで許可
- 1397年 バルケント織布ツunftト…親方所有織機 3 台まで許可
- 1412年 絹織布、紡績ツunftト……新紡ぎ車及び新撚り糸車の使用禁止
- 1400年 晒布工ツunftト……………水力晒布機利用制限

又、生産量に就いては

- 1494年 ビール醸造工ツunftト……毎週他より多くすべからず、平等たる  
事

- 1320～70年 毛布工ツunftト……………役員親方 1 日 4 シュテュック  
(Stück) 迄

一般親方 1 日 3 シュテュック迄

品質と耐久性を重んずる観念の強い中世の人々は、機械装置による製品に懐疑的で信頼を置いていなかった。ちゃんとした製品を作り出せないだろうと言うのが理由であった。上記の紡ぎ車は13世紀初頭には発明され普及し、使用されていたが、これで紡いだより糸をたて糸に使った毛織物を毛織物商人ギルドは14世紀初め迄拒否していた。新技術が採用されるには優秀性を立証しなければならなかった。それには長時間を必要とした。この中世の頑<sup>かた</sup>なまでの保守性は発明、発展に大きな障害になった事は言うまでもない。新技術及び機械の使用を制限するもう一つの理由は、手工業者から仕事を奪うと言う恐れであった。親方達がツunftト特権維持に汲々としてくる14世紀以後になると、劣悪な製品生産防止を口実に、機械使用を制限したのである。

- ③ 雇傭職人及び採用徒弟数制限の事。

ツunftトの職種によって異なるが、大方のツunftトが親方一人につき徒弟は

1～2名、職人に就いても2名程度に限っている。或は“親方一人が抱えうる徒弟・職人は合わせて4人までとする”と弾力性を持たせたツンフトもあった。

#### ④ 材料・原料購入制限の事。

殆どのツンフト規約で製作用原材料の購入には、ツンフト全成員が参加する権利と義務を定めている。従って、他の親方に害を与えるような購入法——他の親方を出し抜いて自分だけが購入する先買いや一括仕入れ、信用買い——は禁止されていた。特に先買いは、価格騰貴の原因となる事から、都市当局は貧窮した親方救済と市民保護を理由に、厳重に禁止した。原材料は常に共同で購入し、公平に分配すべきものであり、これに不服従の親方は処罰された。

#### ⑤ 労働時間規制の事。

殆どのツンフトが、自然光の下での労働を原則として労働時間を定めていた事は、職人の項に記した通りである。夜の仕事が禁じられたのは、白昼顧客や公衆の面前で、ごまかしのない立派な仕事をしている事をよく分かってもらう為と、薄暗い灯火の下では不良品を作り易い事、更に火災の危険がある事を考慮したからである。しかし13世紀頃迄は未だ夕刻、灯火の下で労働することはそれほどには禁じられていなかったようだ。14世紀末になってから夏期、灯火の下で労働する事がきつく禁止されるようになったのである。

労働時間の規制は、日曜祭日の労働禁止同様、一般的原則で、親方のみならず職人、徒弟すべてにかかる事で、これに違反する者は、厳しく罰せられ、道具の没収やツンフト成員権の一時停止か剥奪の重刑が課された。ツンフト首長は市の消灯の鐘が鳴ると、作業場を不意打ちに見回り、違反者取締りに当たった。これは首長の大切な役目だった。しかし、次のような場合には特に夜業が許されていた。陶器工は絶えず窯入れしていて良かったし、日限が限られている急場の仕立屋、そして「王侯貴族や貴夫人」の仕事を受けてる仕立屋や靴屋は祭日でも許可されたのである。

#### ⑥ 賃金規制の事。



職人の項に参照として親方の日給を記したが、これらは1374年のケルン市参事会による賃金裁定である。この裁定によれば

第1条 大工、石工親方は、必ず徒弟一人同伴で仕事に赴くこと。日給。下表参照

第2条 大工、石工職人の日給。下表参照

第3条 屋根葺き、研師の日給。下表参照

	大 工、石 工			屋根葺き	研 師
	親 方	徒 弟	職 人	親 方	親 方
弁当持参の時	8 シリング	3 シリング	5 シリング	9 シリング	9 シリング
スープ付き	6    〃	28ペニヒ	3.5    〃	7    〃	7    〃
食事付き	4    〃	20    〃	32ペニヒ	5    〃	5    〃

徒弟は修業中は賃金を与えないのがツunftの決まりであったが、出作業の時は作業主から支払われた。これは親方が受けておいて、後日渡す事になっていた。

第4条 規定より高賃金を払う者は罰金50マルクを、受け取った者は2マルクと8日間の刑に処す。

第5条 この賃金実施の為に参事会が監督する。

第10条 この規定を認めない者は、罰金100マルクと1年間の収監或は10年間当市から追放に処する。

と定めている。このように厳しく賃金違反を取り締まったが、違反者は絶えなかった。

#### ⑦ 品質検査及び販売に就いての規定

親方は商品の生産者であると同時に、その販売者でもあった。

販売は自分の製品のみに限られていて、他の親方や他所者の製品の販売は禁止されていた。廉売、投機、先手売り、顧客の争奪なども勿論禁止であった。

又、販売場所は自分の作業場兼店舗の住居或はツンフトの共同店舗や会館に限られていて、他の場所例えば、街路上での呼び売りや行商は厳禁だった。

販売の際、同一の商品ならばどの親方が製作した物であっても、同一の価格で販売されなければならない。その為に製品の最低販売価格がツンフトによって決められた。言わば協定価格、公定価格である。そして親方達がこれより安い価格で売ることは禁止され、処罰の対照になった。公定価格の制定はツンフト成員の平等関係を維持する為に欠くべからざる要件であった。

又、同一の商品が同一価格で販売される為には、それらの商品の品質は同一でなければならない。ツンフトは製品の品質に規制を加え、品質検査を厳しく実施し均質性の維持に努力した。例えば織布工ツンフトでは布の大きさ目方は勿論の事、糸の性質、より糸の数、重さ迄詳細な規定を設けている。又、刀剣ツンフトでは骨の柄のナイフに銀の装飾を施す事を禁じた。それを象牙の柄付きナイフとごまかして売らないようにする為であった。鞆皮ツンフトでは、皮はオークのタン皮のみの浸出液に、丸一年間漬けておかねばならない。工程を短縮するために、石灰を加えたり、液を故意に加熱してはならないと規定している。

品質規制は、公定価格制度と一体をなすものであり、同様にツンフト成員の平等関係維持に必要な要件であった。

厳しい品質規制と検査はやがて商品の信用を高め、市場での名声を博させ、売れ行きをいよいよ向上させるものである。そして、その都市の特産品として諸外国にも賞揚され、都市やツンフトに大きな名誉と利益を齎す事になる。この事もツンフト及び都市当局に品質規制・検査を重視させた理由であった。

又、品質規制・検査の精神は公正価格と売り手・買い手間のフェア・プレーをんずる中世人の理念にも合致する事だった。

親方による商売はしばしば商人と衝突を引き起こしたが、販売地域の殆どが狭隘な都市内に限られている親方の販売は、遠く外国迄販路を広げ大規模に商

売を行っている商人には到底太刀打ちできなかった。やがて親方達は徒に対立するより、商人の販路に依存する事の有効さを悟った。商人への依存度が大きくなるにつれて、商人からより細密でより厳しい品質規定の商品“Kaufmannsgut”が要求されるようになっていった。

品質検査はツンフト会館か都市商館で行われた。ツンフト首長の役目で一週間ぐらいかがって検査し、合格品には検印（スタンプ）が捺された。スタンプが捺印されていない物や偽のスタンプを捺印した物の販売は禁止され、違法行為者は親方権没収の厳罰を課せられた。

#### ⑤ 手工業者の生活

中世都市の街路は殆どが5 m以下、大きくても6 m程度の幅の狭い、曲がりくねった凸凹の路だった。しかも路を挟んだ両側の家々の二階の窓から深夜汚物が投げ捨てられるので、大変に不潔であった。路上には各戸に飼われている鶏や豚がうろついている。呼び売り人が“この場所で、このような物を、この値段で売るよ”と通りから通りへ呼び歩いている。又、ブドー酒売り、薪売り、古物商、パン屋……の売り声、風呂屋の親方は“お湯が沸いたよ、今が入り時だよ”と触れて回る。行商人も負けずに大声を立てて路上に立ち止まりながら、大抵はまやかし品を売っている。浮浪者や乞食も入り交じってごった返しの有り様である。馬車は通り抜けるところか、入る事すら出来ない。こんなに喧噪で不潔にも拘らず、市民や商人、親方達はこの通りに面して家を持とうとひしめきあい、間口3.5 m～5 m、奥行き5 m～7 m程の家々が庇を連ねた。通りに面した商人、親方の住居の一階は店舗兼仕事場で、上下に開く板戸の付いた大きな窓とその脇に細長い出入り口がある。その奥に事務所や徒弟のベッドとキッチン、二階は親方一家の住まい、その上の階は物置か職人の寝室になっていた。最上階の壁面には物置に荷を引き上げる為の滑車が付けられていた。そして軒の上には仕事や商品の姿・形を切り抜いた看板が吊るされていた。

文字を読める人が少なかったので字による広告やビラはなく、これがその代わりだった。路の両側の家は二階、三階と階段状に互いに切妻を迫り出し、ぶつかりそうになっていたのです、いよいよ路地は狭く、路地の空気は澁み、日は射さず、暗くなっていた。

夜明けから徒弟はまず店先を清掃し、板戸の上半を押し上げて窓庇にし、下半を押し開いて陳列棚として販売の準備をし、親方や職人の道具類を仕事しやすいように配備した。道具は路上にまで広げられて、忽そこは作業場の一部に化し、職人達は公衆の面前で仕事をした。又、時には手を休めて顧客に対応した。これらは路を一層狭くし、通行人の邪魔をする事になったが、無理に立ち止まらせ、製品を見させて買わせるのに役立った。邪魔も広告宣伝の手段であった。

親方は徒弟に対して食・住、時には衣服を与えるなど十分な世話をする事及び技能をしっかりと習得させる責任を負っていたが、中には徒弟が速やかに仕事を覚えてしまい、強力な競争相手になる事を恐れ、ろくに教えず、召使のような使役で終わらせ父兄から顰蹙をかう親方もいた。徒弟は所定の入会金の外に色々な費用が入り用であった。親方の奥さんに服地をプレゼントしたり、職人達へ挨拶の飲食接待費として8マルク（約1200ペニヒ）を、更に意地悪されずに早いところ技術を教えてもらう為には、時々飲み代を出さねばならなかった。そうしないといつまでも使い走りになり追い回されてしまう。

徒弟修了者や職人から親方になるための親方作品（Meisterstück）も、唯難しだけでなく、大変高額の出費を要するものだった。作品の要求は、親方権独占の傾向が強くなった14世紀以後に現れてきたもので、15世紀始めになると殆どのツunft規約に追加されてきている。親方作品は時間のかかる高価な物ではあるが、職人の実際の能力を証明するものとは言い難い、殆ど無意味な物だった。作品の代わりに金額で代納するところもあった。技能条件の為の規定と言うより、やはり親方数増加防止の為の規定であったと言えよう。親方作品

## 中世ツunftに於ける親方作品要求の時期と場所

年 代	場 所	ツunft
13C.	パリ	馬具師、絹織物工
1272	ベルン	パン屋
1313	シュテッテン	鍛冶屋
1355	ケルン・ニュルンベルク ミュンヘン・フライブルク・ロンドン	革紐、革具工
1360	リガ	金細工匠
1370	リューベック	靴屋
1375	ハンプルク リガ	パン屋 桶屋
1380	シュテッテン	石工
1382	リガ	鍛冶屋
1387	ダンツィヒ	鍛冶屋
1389	リュネブルク	靴屋
1390	リューベック	綱匠
1391	マインツ	仕立屋
1394	マインツ	仕立屋
1394	グライスワルト ローマ	靴紐、革具工 壁工
1399	グンツィヒ	仕立屋

の課題として例を挙げてみよう。

- ・蹄鉄鍛冶屋は、寸法も測らず、蹄を詳しく調べもせず、ただ馬を2・3回彼の前を引いて取り過ぎるだけで完全な蹄鉄を作ることを求められた。
- ・レーゲンスブルクの石工はアーチ型天井を作ること。石の出入り口を石材で切ること。門を作ること、家の壁を作ること。破損した壁か角を修理すること。壁の高さからそれに適した壁の厚さを知り、それにふさわしい基礎を作ることの課題を課された。

- 仕立屋ツunftでは男子服及び婦人服4個を親方作品とし、試験料2マルクを納付の事。作品は8日以内に提出すべし。

- 大工の場合、三軒の農家を建てることで親方作品に代える。

などである。

親方作品応募者は、親方の家かツunftの試験官指定の場所で作品製作に当たった。勿論部屋代、材料費、道具・器具代は自費であった。部屋で仕事をする時も外出時にも鍵をかけ親方に預け、試験監督以外の者の入室を拒み不正を防いだ。試験監督はしばしば監視にやって来た。一般に製作には数週間から数カ月を要したから、応募者もしばしば外出し、その度に仲間の助言を得たり、



Fig. 3

肉屋ツunft首長 Fridrich Plecher

カーニバル行進の宰領 (Amb. 317.2°, Bd. I, 85V.)

右手に肉屋ツunftの権杖を捧げ持つ

[早稲田商学第309号 (昭和60年1月) p. 277. 85V. 肉屋参照]

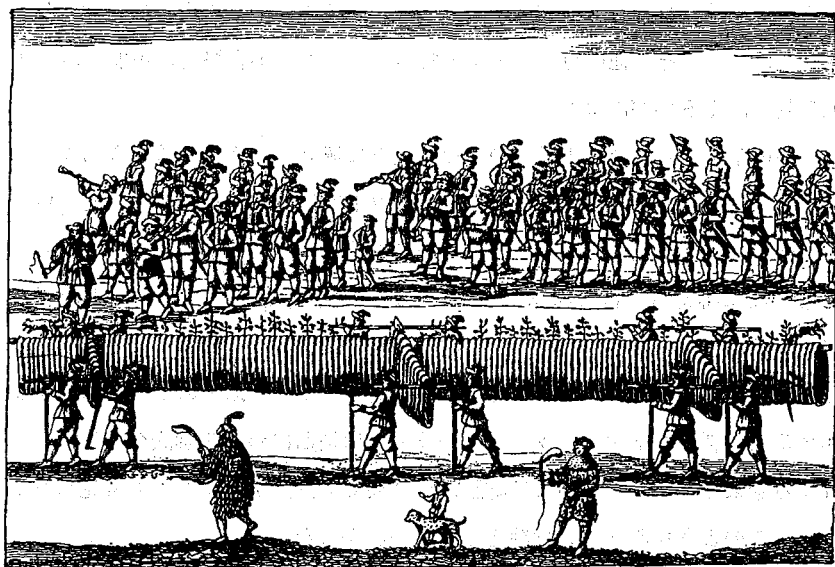


Abbildung der bratwurst, welche von den Knechten des Metzgerhandwerks, den 8. Feb. 1658. in der Stadt von vier Erwohnen herumgetragen, ihre Länge 500. und 1/2 Ellen an, gewicht 500. und 1/2 Pfund, die stangen ward 9. werck schuch lang

Abb. 123. Umzug des Metzgerhandwerks zu Nürnberg 1658. Kupf. von Alexander Böner (1647–1720). Nürnberg, Stadtbibliothek.

Fig. 4

1658年ニュルンベルク市における

食肉業者の行列

〔アレキサンダー・ベエナー（1647–1720）製作銅版画〕

ニュルンベルク市図書館蔵

ソーセージの作り物を捧げて行進している

職人に手間賃を払って手助けを受ける事が出来た。又、このような事は一部で許されていたようだ。従ってごまかすことは容易な事であった。製作が完成すると試験委員達は合否を決定しツンフトに報告した。合格者はツンフト規約に従うことを誓い、加入金を支払って新親方になった。新親方はこの外、試験料、試験監督や自分の親方へ謝礼、そして親方昇進の豪勢な祝賀宴の費用を出さねばならなかった。祝賀宴ではそのツンフト独自の伝統的奇習があり、新親方は

その洗礼を受けて初めて親方の仲間に入れた。親方の子弟の場合は試験作品は免除されるし、その他の点でも色々と特典があった。不合格者は不服の場合上級裁判に訴える事が出来た。

一つの手工業と類似手工業との相違を正確に樹立し、作業領域をきちんと分ける事は困難な事であって、その為にツンフト間に紛争が絶えなかった。例えば、仕立屋は古着屋が新しい布を売り物の衣類に用いているのは違反であると都市当局に訴える。古着屋はほころびの繕いに新布を用いてるだけだと言う（実際はこの口実で殆ど新しい服を調整していた）。当局が古着屋に1.2m当たり8ポンド（約13マルク）から15ポンド（約25マルク）以上のラシャの使用を禁ずるとの判決を下す迄、ツンフトの親方達は長期にわたる訴訟合戦に明け暮れる始末であった。ついには訴訟に疲れ果てて消滅するツンフトも見られるほど、このような訴訟争いは絶えることがなかった。

ツンフト親方にとって最も華やかで誇らしさに胸を膨らませるのは、国王、領主の歓迎の行列や謝肉祭などの祭典の行列、その他の大儀式の行列に参加することであった。行列は先ず、市の吏員その後商人ギルド会員、それから市長、市役員、参事会の面々、警吏の一团、そしてツンフト親方が続くのが正式の定めであった。

ビロードの大礼服を着用し、手にツンフトの権威を示す杖を持つツンフト首長を先頭に、ツンフト毎の晴着で着飾った親方達が列をなし、ツンフトの旗を翻して市中を練り歩いた。続いて仮面をつけ奇妙な衣装の人足達が、職種を示す飾り物や作り物などを担いだり、引いたりした。ツンフトはこの機会に人々にツンフトの栄誉を拡めようとし、入費を惜しまず投じた。特にこの大行列の先頭にたつ事はこの上ない栄誉であったので、この上席権を巡りツンフト同志争いあうのが常であった。血を見ることもあった。（Fig. 3. Fig. 4 参照）

そして、この大儀式の行列の幕は料亭での楽しみな大饗宴をもって閉じられた。



しかし、未だ社会的な身分が公認されていない徒弟や職人は、この盛大な行列に参加することを許されていなかった。唯、華やかな衣装で胸を張って練り歩き親方達を羨しく眺めるだけだった。(後日に至って職人組合も参加するようになった。)

## V 同職職人組合 (Gesellenverband)

### ① 遍歴職人 (Wandergesellentum)

親方作品に次いでツunftが親方希望者に課したもう一つの規制は遍歴であった。この規制の最初は、1375年、ハンブルクの皮鞆工ツunftの規定であったが、この時はまだ自由に任されていて強制的義務ではなかった。それが義務化されて遍歴強制となるのは15世紀中葉以後であり、その後、営業の自由が認められる19世紀に至るまで、この慣行は続いた。

確かに、親方作品提出前の2～4年間で各都市や各国を遍歴させ、新技術を習得し、視野を広め、人生に就いての経験を深めさせる事は若者にとり極めて有意義な事であった。そればかりか、多数の職人が、境界を越えて各地に遍歴修業の旅に出る事は、国内各地の技術を向上させるのみならず均質化を齎すものだった。

こうした名目の下にツunftは遍歴修業の強制義務化を実施したのであるが、実際は身辺に増加してくる親方志望者の規制を意図したもの以外に外ならない事は、親方の子息には免じたり、期間を減じているのを見れば明らかである。

春が来ると職人は職種によって決まった帽子を被り、短剣を帯び、杖を手に、そして少々食料をポケットに詰め込み、下着や手道具を雑嚢に入れ、町から町へ立派な親方を求めて歩いた。

幸いに目指す親方の処に落ち着くことが出来た時、或はどこかに就職出来た時にはその市参事会に、自分の名前、出身地、そして親方名と「市の利益を守り、損害を加えず、法律上の紛争には市の裁判に服し、市の召喚には直ちに



Beilage 9. Arbeitsbescheinigung für den Drechslergesellen Gottfried Wagner, ausgestellt von der Innung zu Leipzig 1801. Nürnberg, Eidrichs Archiv.

Fig. 5

1801年ライプティヒ市ツunftから下付された  
ロクロ細工職人 Gottfried Wagner の就労証明書  
ニュルンベルグ市公文書館蔵

市長のもとに出頭する」事を記した誓約書を提出した。(Fig. 5 参照) 不幸にして目指す親方の下に席を得られなかったとき、職に就けなかったとき、彼らは乏しい路銀しか持ち合わせていないので、直ちに宿泊、食事、これから先の求職、旅費の事などに苦慮しなければならなかった。こんなとき遍歴職人は当地の職人組合の職人宿に駆け込み、色々な世話を受け、助けられた。窮地に

たった遍歴職人に救いの手をのべ、遍歴職人の支えとなったのが職人組合であった。職人組合の存在が遍歴強制を可能にしたのであると同時に逆に遍歴強制が職人組合を強化し、促進したと言うことができるのである。

## ② 同職職人組合 (Gesellenverband)

14世紀には既に、親方達への不満が募り、職人達の運動が見られて来る。そして14世紀末になると、同じような惨めな立場に置かれている同職者達の結合が急速に形成され始める。ツンフトと分離した同職職人組合の結成である。ところでこの結成は初めは同職職人の兄弟団 (Bruderschaft) の形を持ち、会員の相互扶助及び教会への奉獻、教会行事への参加、会員死者の会葬など宗教的団体の特徴を帯びたものであった。

さて、前に触れたように、ツンフトも教会への奉獻、共同墓地の購入、死者の会葬など宗教的性格を持ったものだったが、14世紀末になると、これは職人組合に関する事として切り捨ててしまった。そして職人組合結成もツンフトの負担を肩代わりするものとして反対しなかった。亦都市当局にとっては、これは明らかにツンフトの分裂であり、次第に力を増強して来るツンフトへの牽制として歓迎したのである。同職職人組合が単なる兄弟団である限り問題はなかったが、しかし当然の成り行きとして職人の地位の改善、待遇の向上など社会的、経済的的要求を追及するに至ったり、国内、国外各地域の組合を組織、連合し、ツンフト並び都市当局と対立し、激しい闘争を繰り広げるようになった。これに対して従来地域的であったツンフトも、ようやく各都市のツンフトと協定を結び合い、伝来の支配関係固守の為に一致して当たった。ここにいたり都市当局も組合員を「偽りの敬虔の仮面を被って団体をつくり、法外な賃金引き上げを貫徹するために共謀結託をした」不埒な輩とし、ストライキ参加者を両耳切断の刑に処すと威嚇している。

職人組合への加入は、職人宿に於ける極めて象徴的、秘儀的な入会儀式を受

**Auf Ansuchen Vorzeigenden** *Ihren Ehrl. Gtlichkeit Lefebvre  
den Ehrl. Rath und den Ratsherrn*

eines L. b. M. i. d. h. b. Gesellen, so 24. Jahr alt, und von  
Statur m. k. k. auch L. b. h. b. Saaren ist, wird hiermit  
bescheiniget, daß selbiger, auf allhiefigen M. i. d. h. b. Handwerk 2 1/2 Jahr  
Wochen in Arbeit gestanden, und sich solche Zeit über treu, fleißig, stille,  
friedsam und ehrlich, wie einem jeglichen Handwerks-Meister gebühret, verhalten  
hat. Welches wir Endes Unterschriebene also attestiren, und sämtliche Meister  
des L. b. M. i. d. h. b. Handwerks, diesen Gesellen nach Handwerks Gebrauch aller  
Orten zu fördern, ersuchen wollen. Gera, den 21. Aug. 1778.

### Gräfl. Neuf-M. in Handwerks-

Sachen verordnete Commissari.

*Gräfl. Neuf-M. in Handwerks-  
Sachen verordnete Commissari.*

Ober-Meister.

Ober-Meister.

Als Meister, *Gräfl. Neuf-M. in Handwerks-  
Sachen verordnete Commissari.*  
wo obiger Stell in  
Werk geblieben.

Abb. 60. Gesellenbrief zur Wanderschaft für einen Glasergesellen in Gera 1778. Nürnberg, Germ. Museum.

Fig. 6

1778年, Gera 市ガラス職人に与えた

遍歴の為の職人検定審査証明書

ニュルンベルグ市ゲルマン博物館蔵

け, 更に“絶対に会の秘密を漏らさぬ事”及び“仲間の合言葉をばらさぬ事”  
を堅く誓ったあと許された。若い職人(17~25才位)は職人宿に宿泊し, “お  
ふくろ”と呼ばれている女主人から食事, 身の回りのすべての世話を受ける。  
病気や事故のばあいの面倒も。又職人宿は組合の事務所であり, 会合所, 職場  
斡旋所でもあった。失業した職人や当地で職を得られなかった他所者職人はこ  
こを訪れて色々で世話になった。他所者職人である遍歴職人や渡り職人は職人  
宿に徒弟修了証明書 (Fig. 6 参照) と組合員証を提示するだけでなく, 同職の  
組合に所属する者である事を示す為, その組合で規定している一定のダン  
ス・ステップの所作や口上・挨拶を述べなければならなかった。厳しく定めら  
れているこれらの所作が出来ないと同職仲間と認められないのである。文字が  
まだ良く読めない当時であって, こうした所作が書かれた証明書以上に身分

確認の為の確かな手段だったのである。

仲間である事が認められると名簿に登録され、世話方（組合書記であり、職業幹旋人）に案内されて町の親方を回り職の幹旋を受ける。幸いに就職出来た場合は職人宿に手数料、諸経費、謝礼を払うが、職が得られないときは3日のあいだに限って職人宿で無償の世話を受ける事が出来た。

あぶれ職人、日雇い労働者らは、職捜しの為に朝まだ薄暗いときから町の広場に集まってきて雇い手が現れるのを待つ。それでも職が得られないときは、退きの鐘が響くまで更に待ち続けねばならなかった。こうして3日間続けて職が得られない場合には、市から浮浪者、乞食と同様の扱いを受け、追放、笞刑、強制労働の罰を課せられるので、あぶれ他所者職人は職人宿から路銀と贈り物を受けて他の町へ旅立たねばならなかった。

同じ職種であってもその職人組合は幾つもあった。組合員は合言葉で互いに同志を見分け合い秘密を保ち、組合の団結を固めた。そして組合同志、敵視あい、攻撃をしかけ暴力をふるったりして、毎夜のように激しい組合員の奪い合を演じ世間の輦轡を買う程だった。

職人組合がツンフトの横暴を押さえ、職人を保護し、その地位の向上を齎した事には功績があったが、ツンフト同様に新しい道具や機器の使用、発展には否定的であり、技術の変革にうまく適応していけなかった。亦社会の変革にもうまく順応していけなかったことはマイナスであった。

#### IV ツンフトの崩壊

ツンフトは人間の社会生活の中心が村落から都市へ進展した時代の経済状態に正に照応するものであった。しかし経済はいつの場合でも生き物であり、いつまでも同じ状態に止まっている事を許さない。都市中心の局地的経済は、今や国という、より広範な全国経済への移行に向かって進行し始めた。14世紀以降になると、ツンフトの製品市場は仲介商人の手を借りて、大きく国内の遠隔

諸地方にまでも擴げられていった。そして、14世紀半ばには早くも優勢であったツンフト制度に陰りが見られてくる。ツンフトの政策に対する消費者の反対、職人の反抗、田舎の手工業者とこれに結び付いた商人との一致共同した対立、更にはツンフト内部の争いなど次々と難問が噴出し、これらに対してその都度色々と対策が講ぜられてきた事は既に記した。ツンフト規約の一層の強化と厳守が声高に叫ばれたが、それは空しいものであった。今やツンフトを支えていた精神であるツンフト成員の均等化はただ単に形式的なものに祭り挙げられてゆき、親方達は自己の営業独占確保に狂奔するのだった。

ここでツンフト政策を振り返ってみよう。

ツンフト強制加入と共にツンフト規約が意を砕いたのは、ツンフト成員の均等性を確保し、これを維持する事にあった。つまり、ツンフト内の一部の親方に資金の集中を生ぜしめない事と、ツンフト内の他の親方を支配するような強力な親方を作り出させない事であった。親方間の分化の発生及び新たな資本勢力の存在に基づく新たな生産体制の出現即ち問屋制度、家内工業制などの出現を恐れたのである。だから親方達がツンフト内の他の親方の為に働く事やツンフト外の者との協同、商人の為の労働の禁止を厳しく規定したのだった。しかし実情はこれらの規定が厳守され、実行される事は希であったようだ。

12世紀以来の都市内には多種多様な手工業が活況を呈していた。しかもその多様な手工業が更に細かく分業化されていた。14世紀末、15世紀中葉と時代を経るに従い、独立手工業部門の分化は数を増し200種程にも及ぶ状態になっている。これはツンフトに於ける分類が、生産過程の技術上の工程別に横に区切って行われたのではなくて、最終生産別に縦割りに行われた為であった。例えば繊維産業について言うと、原材料採取、紡績、織布、染色、仕上作業など個別的技術過程別に分類するのが横に区切った分類である。これに対してラジャ織布工、毛布工、麻織布工、バルケント織布工、テイルタイ織布工、敷布工、織物製造工のように完成品別なのが縦割りの分類である。仕立屋、ズボン

仕立屋、上着仕立屋、マント・ズキン仕立屋……、靴屋、長靴屋、子供靴屋、古靴屋……、刀工、小刀工、刀剣工、ナイフ工、鞘工……枚挙にいとまがない。

しかしながらこの縦の分化は正にツンフト規約の均等性の確保に沿うものだった。生産工程を横に分化した場合には以前刀剣仕上げ師〔「メンデル家12人兄弟館の書」について（9）、69（商学335号、p.194）〕に於いて触れたように、製品の最終段階を扱う親方が他の親方を圧迫して、経済的権力者・雇主の地位を得る危険が大きかったからである。最終段階にあることにより他の親方より逸速く経営上有利なニュースや顧客の意向・要求を直接に知り得たし、手工業技術者よりも商人として行動するチャンスが多く、親方達に、商業により多くの魅力をおぼえさせるからである。亦自己の活発な商業活動により、必要な原材料の獲得がツンフトから独立して出来るからである。

ツンフトの崩壊への兆しはもう14世紀末には顕著になってきていた。その形態はドイツ、フランス、イギリス……各国に於けるツンフトの進行状況が異なっていたのと同様に色々と異なったものであった。その時期にもずれがあった。

資本と経営の才能に恵まれている親方は、商品生産労働は雇職人や徒弟に全く委ねて、或時は粗製材料の仕入商人の如く、亦ある時は自分の製品の小売商人の如く各地を活動して回る事に専念し、資本の増大に努め、資本家的親方になっていった。やがてこのようにして入手した粗製材料を他の親方や他のツンフト・メンバーに授けて、生産労働に従事させるようになった。生産労働は親方個々の家でなされる場合——“家内工業制度の萌芽”——と、全く資本家的親方の作業場の中で行われる場合——“工場制度の萌芽”——とがあった。資本力の優越が自然に特定の親方を雇主の地位に押し上げ、他のツンフト仲間を従属させ賃労働者に転落させたのである。明らかにツンフト規約違反の行為で、ツンフト崩壊を齎すものである。この崩壊は“ツンフト内部での階級分化”と言われているタイプのものである。このタイプの事例はイギリスでは珍しいこ

とではなかったが、ドイツでは見られない事だった。ドイツでは親方が商人的様相を示して時は直ちに当初のツunftを除名され、商人のギルドに移らねばならなかったから。

ツunft崩壊の第二のタイプは“ツunftの合同 (Fusion der Zunft)”といわれるタイプである。このタイプの崩壊はまたイギリスに、そしてフランスにも見られたが、ドイツではそれほどは見られなかった。

合同には、①ツunft制度の擁護とツunft勢力強化を目指して行われるものと、②企業の独占と商業的機能の勢力強化を狙ったものがあつた。

①の場合の例をロンドンの鞍師について見てみよう。鞍製作には指物師、塗り師、馬具金物師の一連のツunftの手を経て最後に鞍師によって完成される。いずれのツunftも対等な権利をもった独立団体である。にも拘らず鞍師のツunftが突然「指物師らの三ツunftは、どんな物であっても鞍作りに関係ある品物であるならば、鞍師以外の者に売ってはならない」と言う宣言を行い、各ツunftが本来有する販売の権利を侵害して憚らなかつた。これに対して三ツunftは合同して市当局に提訴してツunft制度擁護の為に闘い、一応有利な解決を得たのであるが、時の推移につれて鞍師の商業的機能の支配下に陥ってしまった。

ドイツ、ゾーリングゲンの刃剣産業にも同様な事例がある。

刀剣は剣身鍛冶、焼入れ師、研ぎ師、柄頭鍛冶、柄師、鞘師の諸職を経て製作されるが、主なるツunftは刀身鍛冶、柄頭鍛冶、柄師、鞘師である。このうち生産過程最終の鞘師が、すべての先生産ツunftを自分の傘下に掌握する事を図つた。そこで三ツunftはツunft擁護の為に合同してあい争つた。長年の闘争後やがて協調し、市場での相互平等を確認したが、結局、鞘師が市場を収めて勝利者になってしまった。

ここに一群の手工業ツunftが、このグループ全体の商業的機能を掌握してしまつた一個のツunftに従属し、崩壊して行く姿を見るのである。



次に②の例をバリの鞍師に就いて見てみよう。鞍製作に係わるツunftはロンドンの場合と同一であるが、商業的機能を発揮させていたのは鞍師のツunftだけでなく馬具金物師ツunftも同様であった。当初両者は対立したが、やがて対等な立場で合同し製品検査権、販売独占権を獲得し、指物師、塗り師の二つのツunftを支配下におとし入れてしまった。

亦、同様の事例をロンドンの刀剣製造ツunftにも見ることが出来る。前記ドイツ刀剣産業の場合と同様に、鞍師は同時に刀剣仕上げ師として完成品の検査・販売を牛耳っていた。そこへ柄師も亦検査・販売の権利を訴えて争うに至ったが、やがてこの二つのツunftは合同して商業的機能の強化を図り、刀剣製造グループ内の他のツunftを完全に従属せしめてしまったのである。

上記のツunft崩壊は、いずれも一つの商品生産過程グループ内のツunftが、他のツunftに必要な資本と経営能力を提供する事を原因とした場合であったが、次の第三の場合はツunft外の商人の影響を原因として生じたものである。それは、粗製原料が非常に高価で、その買い付けや輸入に大きな資本を必要とする商品——“例えば絹、琥珀、新奇な原料としての木綿の如き物”——の場合、小資本のツunftには重荷であって、商人；問屋商人に依存せざるを得ない。

或は、製品が遠く国外まで販売を広げるに至ると、もはや親方自身が販売に携わる事が出来なくなり、遠隔商人や海外交易商人に依存せざるを得なくなる。生産も亦本質的に輸出を目的として行われるようになり、自ずと問屋の存在が必要不可欠になる。そしてこれらに関連のツunft親方は、資本のみならず販売チャンスを掌握し、経営策を巧みに展開する交易商人、或は問屋の要求に屈し、その要求に従わざるを得なくなる。こうして経済的にも経営的にも依存するようになった諸ツunftが最後には、従属的立場に陥り、商業的組織の傘下に吸収されてしまうのである。

ところでツunft政策のもう一つの面である親方達のツunft世襲権及び子

息の徒弟修業免除或は期間短縮の優遇策を謳ったツンフト規約は、親方達の企業独占権を確保する為の手段であったが、同時にツンフトを崩壊に導く要素も含んでいた。

ツンフトでは徒弟期間を2～3年としていたが、修業修了後ツンフト加入申請前の1～2年間のお札奉公や親方試作品、遍歴修業などを義務付けられていたので、実際の修業期間は6～7年の長期に亘ったのである。従って複数のツンフト資格を取得する事は不可能なことであった。しかし親方の子息は初めから特権的に相続した父親のツンフトと、徒弟修業で獲得した他の職のツンフトとを兼業する事が出来た。これは明らかにツンフト規約に反する事である。と同時にやがては種々のツンフトを統合へ導いて行く危険を含むものであった。

ツンフト加入から締め出され職人達は、職人組合を力にして親方達に要求を突き付けた。親方の家に宿泊して低額な時間給で働くのではなくて、自分の責任で、自宅の仕事場で、出来高賃金で仕事をする権利、それもその単価を親方が手にするものと大差の無い金額を主張し続けた。そしてこの主張が達成されたとき、職人と零落して行く親方と経済的地位に関しては同一の立場に立つに至った。両者の相違は単に形式的相違にすぎないものになってゆき、親方の権威は著しく凋落して行った。今や職人は小親方と言う地位に上昇したと言える。15世紀以後になると親方が雇職人として働く事を禁止する規約の出現が見られ始めるが、この事は強固であったツンフトの箍に緩みが生じた事を示すものに外ならない。

亦、都市内に職を得ない職人は古物修理の専門職になるか、ツンフトや都市当局の手の及ばない田舎に逃れて仕事をするしかなかった。しかも、これらの職人は小親方と共に田舎の家内の手工業者と結合し、亦商人と結び合って家内工業、問屋制度の発展に貢献して行った。そして側面からツンフトの崩壊に手を貸す事になったのである。

先にツンフト崩壊の経路は国によって異なると記してきた。そしてその一部

を見てきたが、その経路は一口で言えば、ツンフト・メンバーが商人と手工業者に分化し、商人階級が支配権を掌握してゆく過程であったと言える。

イギリスやフランスの都市にはドイツのような強固な都市独立自治主義がなかったので、独立のツンフト政策を持たなかった。規約に対する取扱いも極めて寛大であった、と言うよりも既にツンフト精神を喪失してしまっていた、と言うべきであろう。そしてツンフトの諸規約を障害視して止まない商人達が自身でツンフト（擬制ツンフトと言われる）を形成し、無力な手工業親方達を排除しツンフトを崩壊させてしまったのである。従って問屋制度、家内工業への転換は特に問題になるような現象ではなかった。ツンフトのこれに対する抗争はしらぬ間に終わってしまい、親方や職人に代わって家内工業的小親方が台頭したのである。これに対し、ドイツには小親方の独立も、問屋の存在も見られなかった。ツンフトの封鎖性はいいいよ親方と職人の対立を激化させ、無残にも職人から希望の光を奪い取ってしまった。ドイツでは16、17世紀になっても依然としてツンフトは存在した。そしてドイツは、イギリス・オランダに、フランスにも流れ込んで行った資本主義の流れから、遥後方に取り残されてしまったのである。

### おわりに

12世紀以降の中世西欧世界の手工業及び手工業労働者の親方、職人、徒弟を支えたツンフトに就いて自分なりに整理が出来たように思う。これも一重に多数の著名な著書、翻訳書、文献のお陰によるものであり、ここに改めて深謝の意を表する次第である。しかし浅学非才であり、門外の徒である為に、誤解や不備な点が多々ある事を危惧するものである。何卒ご寛容の上、ご指導の程をお願いしたい。よく日本語は学術用語・論文用語には不向きである。概念規定が曖昧模糊<sup>しづ</sup>としているとか、融通無碍<sup>しづ</sup>だからなどと言われている。参照の文献を再三読み返してこの事によく当面した。特に翻訳書の場合にしばし

ばであった。例えばツンフト成立以後、親方と職人は、はっきりと区別されたものであるが、単に職人と記してあって、どちらを示すのか曖昧である事が多かった。亦、自由民と言う概念についても同様な場合に出会った。一つの言葉或は概念の使用に当たって、Aを示すのかBを示しているのか微妙で分かりにくい事が多かった。つくづく難しい事だと痛感させられた。原書が手元にあればすぐ分かる事なのであろうが。こんなところにも門外の徒の弱さを感じた。充分注意・検討して取扱ったつもりであるが、不備・誤用の点、お教え頂ければ幸甚の至と存じている。

13世紀以降の西欧世界の中で、ドイツの手工業は群を抜いた第一級の地位を占めていた。にも拘わらず、本文に記した様に16世紀末には、後進のイギリス・フランスに遅れをとり、資本主義の流れから取り残されて、世界の舞台から退いて行った。しかし19世紀中葉には再びドイツの工業力、工業技術は世界に力強い再来を見せてくる。最後までツンフトにしがみついていた為に時流から落とされて行ったあの頑固な気質のドイツにどのような変化が生じたのであろうか？ 何がドイツを再興させたのであろうか？ 大変に興味をそそられる問題と思う。いつか考えてみたいと思っている。

さて、この場を借りて、「「メンデル家12人兄弟館の書」について（4）」（早稲田商学312号昭和60年7月）の“133, 教会振鈴係（Glöckner）”（Fig. 133, p. 141）の記事に少し加筆する事をお許し頂きたい。Jobst 癲療養所の振鈴係 Jerg Pair の仕事がどのようなものか浅学の為に定かでなかったので、そのままに置いて大変気掛かりに思っていた。ところが幸いにも、最近白水社から出版されたF・イルジグラー、A・ラゾッタ著、藤代幸一訳“中世のアウトサイダー”（1992年5月）と言う書の98頁に振鈴係に就いて記されているのを知り、拝読させて頂き、やっとすっきりすることが出来た。その要点を記させて頂く。

“当時、癲病患者は伝染を恐れられて、教会や修道院施設の病院に隔離されていた。病人達の生活費を賄う為、時に応じて鈴当番（振鈴係）と呼ばれる者を

雇い募金をおこなった。彼は鈴と募金箱、ずだ袋を持って、市民の慈悲心に訴えて毎日市中を巡回し施し物を集めた。……こうした施物収集係をフランクフルトでは Klingelmann, ニュルンベルクでは Glöckner シュトラスブルクでは Klingeler と呼ぶ”と。

本書に巡り会えた事を大変感謝している次第である。

(1992.9.16)

#### 参考文献

- (1) Der Handwerker in der deutschen vergangenheit. Ernst Mummenhoff. Eugen Diederichs Verlage Koln. 1924.
- (2) Die Welt des Hans Sachs. Herausgegeben von den Stadtgeschichtlichen Museen im Verlag Hans Carl, Nurnberg. 1976.
- (3) Kulturgeschichte des deutschen Handwerks. von DR. O. D. Potthoff. Hanseatische Verlagsanstalt Hamburg. 1938
- (4) Lexikon des Alten Handwerks. Reinhold Reith. Verlag C. H. Beck. 1990.
- (5) Lexikon der Sitteen und Gebräuche im Handwerk. Herbert Sinz. Herderbücherei Freiburg im Breisgau. 1986.
- (6) Des alten Handwerke Recht und gewohnheit. Rudolf Missell. Stadtbibliothek Nurnberg. 29/18 (1. 2.)
- (7) 世界歴史 9, 10, 11. 「中世ヨーロッパ世界 I. II. III.」 岩波書店 1970.
- (8) 世界の歴史 9. ヨーロッパ中世 鯖田豊之 河出書房新社 昭和57年
- (9) 生活の世界史 6. 中世の森の中で 堀米庸三 河出書房新社 昭和58年
- (10) 世界の歴史 3. 中世ヨーロッパ 堀米庸三 中公文庫 昭和56年
- (11) 世界の歴史 5. 中世ヨーロッパ 堀越孝一 三浦一郎 教養文庫825 社会思想社 1987. 8.
- (12) 中世の秋 (上. 下.) ホイジンガ 堀越孝一訳 中公文庫 昭和60年
- (13) 中世の光と影 (上. 下.) 堀米 庸三 講談社学術文庫205 昭和60年
- (14) 世界の歴史 7. 近代への序曲 松田智雄 中公文庫 昭和56年
- (15) ドイツの都市と農村 榎川一郎 吉川弘文館 平成元年
- (16) ヨーロッパの歴史 アンリ・ビレンヌ 佐々木克巳訳 創文社 1991.1.
- (17) ヨーロッパ文化発展の経済的社会的基礎 アルフォンス・ドブシュ 野崎. 石川. 中村訳 創文社 昭和56年
- (18) 中世の日常生活 ハンス・ヴェルナー・ゲッツ 樽田収等訳 中央公論社 1989.
- (19) 中世の窓から 阿部蓮也 朝日新聞社 昭和56年
- (20) ヨーロッパ中世社会史事典 A・ジェラルド 池田健二訳 藤原書店 1991.9.
- (21) 中世の戦人 (I. II) ジョン・ハーヴェー 森岡敬一郎訳 原書房 1986.4.
- (22) 中世戦人史 ビエール・ブリゾン 臼井勝喜代訳 西田書店 1986.10.
- (23) ドイツの戦人 高木健次郎 中公新書467 中央公論社 昭和52年
- (24) フランス歴代の戦人たち リュック・ブノワ 加藤節子訳 白水社 1979.11.

- (25) 鉄の歴史 ルードウィヒ・ベック I(3), II(2, 3) 中沢護人訳 たたら書房
- (26) 西洋中世都市とギルドの研究 伊藤栄 弘文堂書房 昭和43年
- (27) 一般社会経済史要論 上巻 M・ウエーバー 黒正, 青山訳 岩波書店 1991.11.
- (28) ヨーロッパ中世経済史 ヨーゼフ・クーリッシェル 増田四郎監修 伊藤栄, 諸田實訳 東洋経済新報社 昭和58年
- (29) ギルドの解体過程 G・アンウィン 樋口徹訳 岩波書店 1980.9.
- (30) 中世のアウトサイダーたち F・イルジエグラー, A・ラゾッタ 藤代幸一訳 白水社 1992.5.